特別寄稿 相馬藩の指導精神と相高魂 (※1)

旧職員　中第 25 回卒 岩崎　敏夫 (※2)

相馬藩の二大指導精神とは何か、古くは今も野馬追に残る武士道精神であり、一つは二宮尊徳のの徳を以て徳に報いる報徳精神である。指導精神の確立している所には必ず国が栄える。相馬はこの二大精神をわき目もふらずに守ってきたので今の繁栄を見ているのである。

一、武士道精神

強いばかりが武士道ではない。私は典型的な花も実もある武人として先ず相馬顕胤をあげたい。顕胤は相馬将門から数えて 25 代大永元年から天文 18 年まで相馬の領主であった。武勇あり、信義を重んじ、思いやりの深い人であった。隣の伊達氏とは親戚関係で仲がよかったが、当時伊達の領主稙宗が、その子晴宗のために岩城重隆の娘を迎えようとして、斡旋方を顕胤に依頼した。岩城は相馬の隣なので骨を折り、一度は岩城の承諾をとりつけたが、乱れた戦国時代ゆえに岩城ではその約束を反故にした。信義にあつい顕胤は怒って岩城に攻入り、娘を奪って伊達に渡した。稙宗はこれを謝して、伊達の領地の一部を相馬に贈ろうとした。これに反発した晴宗は父親の稙宗を西山城に幽閉した。顕胤はこの不幸の子を討たんとし、伊達との不和はここから始まった。

顕胤は思いやりの深い人で、伊達との戦で戦死した相馬の人だけでなく敵方の戦死者も一緒に埋葬したのが敵味方塚として今も残って居り、赤十字思想活動の模範と言われている。顕胤は相馬に帰り、戦死者の供養を何日も行ったというが、これが相馬の剣社の起こりで、我国でも最も古い招魂社の一つと言われている。随って今相馬神社の境内にある剣社には顕胤以来の代々の戦死者が祀られて居る。

…　中略　…

義胤の政宗に対する敵愾心は執念のようなもので領地の一部をとったりとられ返したりしたが、相馬の祖先伝来の土地は遂に一歩も敵の蹂りんにまかせなかった。

義胤が死ぬ時に、身に鎧を着せ、手に槍を持たせて伊達のある北向きに葬らせたのも、人は義胤の勇武のみを讃えるかも知れないが、彼は真の武士道の権化であった。相馬を守りぬいてくれた第一の恩人である。

彼が単なる武人でなかったことは、さすがの政宗もほめ、このことは有名な新井白石も『藩翰譜』に書いている。

…　中略　…

以後代々の相馬の藩主も義胤の心を受け継いで伊達に対抗し、藩士には文武の道を奨励した。妙見の祭として野馬追を盛んにしたのも、単に馬を追っての武事だけでなく、信仰の力、信仰による結束を重んじたのであった。義胤の子利胤が、藩のほぼ中央の小高を去って伊達藩との境に近い中村に城を築いて移ったのも伊達に対して背水の陣を敷いたのである。利胤の意向として相馬家の墓も中村附近に移そうとした。これは実現しないですんだいきさつもある。秀吉の私戦禁止令後大きな戦は無くなったが、伊達に対する警戒は明治の戊辰役まで続いた。

…　以下略　…

二、相馬以外の人の相馬評価

相馬は小藩でありながら、幸に歴代の藩主、藩臣がそろっていて、度々の難をのり切ってきたのは幸であった。小さいながらも相馬は東奥の君子国であった。

土佐の大学者谷泰山は、その師であった貞享暦をつくって日本暦学の祖と仰がれている渋川春海の言として、「相馬は国を建て、武職を守ること７百年」といい、薩摩が相馬と比べられるばかりで、この両者は古今の双璧とほめた上、しかし「真の武職は相馬に限る」と相馬をこの上なく高く評価してくれている。即ち３百諸侯中とくにすぐれているのが相馬だというのである。

…　以下略　…

三、二宮尊徳の報徳精神

瀕死に近いような相馬を救ってくれたのは二宮尊徳の報徳の教えであった。相馬ではご仕法と呼ばれているが、相馬人なら知らぬ者はないのでここにはすべて省略するが、当時危険思想視されている二宮の方法を取入れた藩主巻胤と充胤の決断があり、家老草野、池田の２家老があり、富田高慶、斎藤高行、荒至重らが実地に村々の仕法を指導した。そして弘化２年から 27 年間、領内各地に仕法を施し、明治維新、新政府になって続行できなくなったが、大体完了したとみてよい。全国の藩で二宮の方法を用いた所が多いが、最もよく出来たのは日光と共に相馬だと言われている。

…　以下略　…

四、地域に根づいた報徳思想

以上相馬は古くは武士道精神、近くは報徳精神にやしなわれてきたが、根底に何時も流れているのは平和愛好の思想であった。それは山あり海ある気候温和な土地に人情ゆたかに養われてきたからでもあろう。民謡が発達したのも土地柄である。武士道精神というのも神を尊ぶ妙見信仰がもとになっていた。

わが母校の相馬高校にしみついている質実剛健の思想も武士道精神の流れをくむものであり、いつの代か校是にとられている至誠も報徳の教えの至誠である。校歌の「勤倹至誠とこしへに匂う愛宕の山桜」もいい言葉である。

…　以下略　…

（付記）

近頃感動することが２つほどあった。先に亡くなられた相馬恵胤氏は相馬将門以来 43 代の相馬の殿様で相馬市の名誉市民でもあった。先達て相馬神社に合祀されたが、氏の言葉で私の印象に強く残るのは「相馬家では代々領民を大切にしてきた。ききんがあって餓死する場合一番先に死ぬべきは殿様で次は家老であり、領民は一番最後に残さなくてはならない、というのが先祖からの教えとなっている」ということである。そして恵胤氏は雪香さんと共に世界的な二宮尊徳の信奉者であることはあまりにも有名である。

…　以下略　…

（※１）創立百周年記念誌 『 相中相高百年史 』　〈 1998（平成 10）年７月６日発行 〉

（注）「特別寄稿」文章の約７割は省略しました。

（※２）中村出身。

（ 転記＆※脚注　村山 ）